

福澤研究センター通信

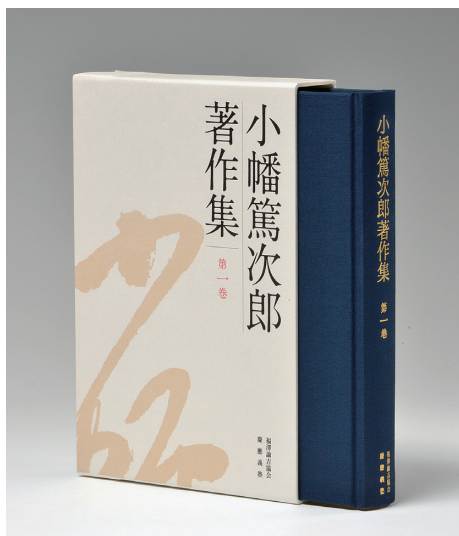
Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第36号 2022年4月30日 発行

目次

*小幡篤次郎の初期著述と慶應義塾の活動 (平石直昭)..... 2	*野球小説家安倍季雄の発見 —慶應野球と近代日本展余滴— (今井隆太)..... 6・7
*翻刻の難しさ——『小幡篤次郎著作集』の翻刻を終えて (川崎勝)..... 3	*新収資料紹介..... 8・9
*『小幡篤次郎著作集』第1巻 完成披露 (西沢直子)..... 4	*主な動き..... 10
*『慶應義塾150年史資料集』第3巻を刊行して (西沢直子)..... 5	*センター諸記録 (2021年10月～2022年3月)..... 11
	*スタッフ一覧..... 12

『小幡篤次郎著作集』刊行はじまる



① 外箱には直筆の小幡2文字。
本体表紙中央には直筆フルネームの空押し加工。



② 明治26年第3学期別科卒業写真
(校舎を挟んで左に小幡、右に福沢)

慶應義塾図書館所蔵

今春、慶應義塾大学出版会から第1巻が刊行された(写真①)。

小幡篤次郎は、福沢諭吉と二人三脚で慶應義塾を支え続けた人物であった(写真②)。義塾の教師としてのみならず、彼は明治時代の著名な学者の一人として世に評価されていた。その事実は、田中正造の回想が端的に示している。田中は明治10年を翻訳書が大に行われようとしていた時代であったと述べ、それらの訳者として福沢、尺振八、中村正直と並べて小幡の名を記したのだった(「田中正造昔話」)。

小幡が果たした慶應義塾への貢献、そして近代日本への貢献は、福沢の陰に隠れて忘れ去られてきた。残された手がかりは少ない。著作や書簡・書画のみならず、日記や備忘録の存在が明らかになれば、研究は飛躍的に進むことになる。古書肆をはじめ、慶應義塾や福沢諭吉とゆかりのある関係諸機関、個人の皆様にはぜひ小幡(号は三田に因んで箕田)に関する資料収集へのご協力をお願いしたい。(住田)



小幡篤次郎の初期著述と慶應義塾の活動

福沢研究センター客員所員 平石直昭

今年の3月末に公刊された『小幡篤次郎著作集』第1巻には、『英文熟語集』、『天変地異』、『博物新編補遺』、『生産道案内』の4種が収められている。序文の日付は、それぞれ慶応4年3月(弟の甚三郎と共著)、同8月、同月、明治3年3月である。慶應義塾の創設が慶応4年4月であるから、4種はその草創期の作にあたる。

当時の思想史について私は、おもに福沢の『全集』や『書簡集』を素材にして考えてきた。しかし今回、小幡の初期著述をまとめて読む機会を得て、従来よく注意せずにきた幾つかの関連に気づいた。それについて書いておきたい。

一つは義塾の洋学教育で幕府開成所以来の蓄積ももった意味である。元治元年(1864)、江戸で英学の勉強を始めた小幡兄弟は、慶応2年に幕府開成所の教授手伝を命じられた。最初の著である『英文熟語集』が、この職務と関係するのは明らかであろう。また『生産道案内』は、渡部一郎(温)が英文原書を翻刻した『経済説略』の邦訳であるが、渡部は開成所における小幡の友人であった(前掲小幡著155頁)。興味深いのは、明治2年8月の「慶應義塾之記」中の「日課」に「経済説略素読」があり、小幡甚三郎が担当していることである(『慶應義塾社中之約束』福沢研究センター資料(2)、1986年、214頁)。学生が経済学の基礎を英文『経済説略』によって学ぶ際、その邦訳である『生産道案内』が役立つのはいうまでもない。こうした事実は、開成所以来の蓄積が(福沢が米国から持ち帰った書物以外に)義塾の英学教育で生かされたことを示している。

次にあげたいのは、西洋人による漢文の洋学紹介書との関連である。小幡の『博物新編補遺』はチェンバース社の *Introduction to the Sciences* の邦訳であるが、小幡は合信(B. Hobson)の漢文著書『博物新編』に因んでこの表題をつけた。それは『新編』が中国・日本の識者に「窮理の端倪」を示し「大知の域に進む」のを助けたという評価による。ただ漢文の『新編』は児童には難しすぎる。そこでその補遺として「西洋文明開化」の由来の源を知るのに適当な本書を訳したというのである(前掲小幡著33~34頁)。

西洋人の漢文著述に対する評価は福沢も同じだった。明治2年の松山宛書簡で彼は、洋学校の建設より一般人民への洋学伝授が急務だと強調し、論語の代わりに知環啓蒙を読み、庭訓往来をやめて窮理図解を手本の文字とし云々と書いている(『書簡集』①113頁)。いうまでも

なく『智環啓蒙』は、Bakerの英文初等教育読本をJ. Leggeが漢訳したものである。明治3年3月の「学校之説」には、洋学と漢学とを「同時に学んで共に上達すべし」「翻訳書を読む者は先仮名付の訳書を先にし追々漢文の訳本を読むべし」とある(『全集』⑨380頁)。洋学教育の中心であるはずの義塾で漢文習得が推奨される皮肉は、上記のような関連を考えればよく理解できよう。

第三にあげたいのは、『天変地異』以下の小幡の3著が、福沢の『訓蒙窮理図解』『世界国尽』と同じく「婦人小児」を読者層としていることである。福沢や義塾社中には、知識の乏しい者は一身の独立を知らず、そうした者に天下の独立を説いても無益だという把握があった(『書簡集』①117頁)。ボトムアップが「方今之急務」とされた所以であるが、とくに婦人小児の教育を重視したのは、どんな理由によるのだろうか。

「世界国尽序」(明治2年8月)で福沢が引く米国のワルプランクの文章は、この点で示唆的である(『全集』②582頁)。彼によれば、次代の共和政治を担う人民を育成する上で、最大の役割をはたすのは慈母の鞠育であり、ついで学校教師の教育である(注)。福沢がこの演説から受けた感銘は、訳文が原文以上に含蓄に富むことに窺える。『訓蒙窮理図解』や『世界国尽』の見返しには、学問する洋装の母子や婦人の図が掲げられ、後者に描かれた巻紙には「世教出自慈母」と記されている。ワルプランクを承けた観念であろう。

さらに『国尽』は米国の独立戦争を紹介する中で、英軍が克てないのは米国の「国中の人一般に独立を望み、婦人小児に至るまでも其気象を備へ」ているからと推測する(同上635頁)。一国の独立はその気象が婦人小児にまで浸透してこそ担保される。福沢や小幡はそうみていたと言えよう。婦人小児向けの著訳書出版の背景には、将来を見越して社会の基礎で、一身独立に必要な智識の普及を図るという義塾の戦略があったわけである。

注。ワルプランクはG.C. Verplanckを指し、亡くなった某教師の功績を彼が称えて行った演説から福沢は引いている。長年に及ぶ調査の末にこの点を解明したのはAlbert Craig教授である。“Warupuranku on the Death of a Schoolmaster”(『近代日本研究』13巻1~23頁、福沢研究センター、1996年)。教授は昨年12月1日に93歳で逝去された。英語圏における福沢研究の泰斗を喪った損失は大きい。この場を借りて深い哀悼の意を表す。



翻刻の難しさ

——『小幡篤次郎著作集』の翻刻を終えて

福沢研究センター客員所員 川崎 勝

『小幡篤次郎著作集』第1巻に収録したものの底本は、すべて木版本に依っている。木版本とは、木の板に文字や絵を彫刻して印刷された書物である。古くは奈良時代の経典や、中世の五山版などの宋元の書籍の覆刻本、キリシタン本などから、江戸時代に滑稽本などの小説類の刊行によって発達し、洋式活版印刷が普及する明治時代初期まで継続された印刷形態であった。1875年(明治8)に刊行された福沢諭吉の『文明論之概略』の初版も、儒教流の故老に訴えるために古本の太平記同様の版本の体裁にしたことを思い出される方も多いに違いない。

ところでこの木版は、活字版と違って、板木の作製者の書体が大きな意味を持つことになる。『天変地異』の場合、表紙と扉は漢字の楷書、序は漢字は草書・かなは変体仮名、凡例と本文は漢字は楷書と行書・かなは現行仮名と変体仮名との混用である。このうち特に困らせられたのが草書の判読である。

「天変地異序」にある「解」の字の決定には最後まで手古摺った。p.3の5行目の「弁解」は問題ないのだが、その下の「天変地異の解」、6行目の「解の一字」[Ⓐ]、13行目の「解せず」[Ⓑ]、p.4の3行目の「惑を解」[Ⓒ]の4字の読み方である。最初はすべて「解」と読んであったのだが、私が異を唱えてしまったことによって、随分時間を取らせてしまった。私はそれを「解」ではなく、「辭(辞)」の方がいいのではないかと。理由の一つはくずし字辞典類(法書会出版部『五体字類』西東書房、増補版1930年、若尾俊平・服部大超『くずし解読辞典』柏書房1976年、児玉幸多『くずし字用例辞典』東京堂出版1981年など)の用例には「解」にこの字体は見いだせず、「辭」の方に近いものがあり、意味としても鎌田正・米山寅太郎『新漢語林』(大修館書店2004年)に「説く、説明する」、白川静『字通』(平凡社1996年)に「おしえる、さとす」などがあったからである。



しかし、平石直昭さんから、「『天変地異』の方ですが、私は全部「解」と翻刻してよいと思います。朱で「辭」と直した原文の崩し字はたしかに「辭」と読めますが、他

方で、普通の漢和辞典や『中日大辞典』のような辞書で調べても、「辭」に「解(解説する)」に該当する意味はないので、「辭」と翻刻すると、文の意味が通じなくなることを恐れます。これに対して崩し字の方は、「解」ではなく「解」の崩し字と考えれば、「解」の崩し字との違いは説明できると考えます」との教示があった。さらに、序の「哀むべき惑を解かん」(草書[Ⓒ])の直後にある凡例の冒頭「婦人小児の惑を解き」(行書=解[Ⓓ])とは同一の文脈であることから見ると、両方を同字と考えた方がよいかもしいかなということになり、編集長の西沢直子さんに決定を委ね、「解」とすることになった。

これを書くに当たって、友人の藤井譲治さん(京都大学名誉教授)から似たような字を教えていただき、さらに孫虔礼の書(円藤祐之『草書の字典』講談社学術文庫、1979年)にほぼ同じくずし方[Ⓔ]を見つかることができた。したがって、「解」と読むことに決定してよかるう。



こうしてみると興味深いことは、虔礼は中国唐代の書家、王羲之父子に学び、のちにお手本となる『書譜』を著した著名人であるから、板木の作製者は当然それは知っていたであろうし、とくに彼の字体を真似たわけでもなからうが、かなり多くの草書を認知した人物であることになる。あるいは、小幡自身がその字を好んでいたのであろうか。福沢も好みの板木製作者がいたように、著者・板木作製者・版元の関係をはじめ、書簡などを通じての小幡の筆跡研究も興味深いものがあり、今後の研究に期待したい。

それにも拘らず、ではなぜ最初の一文字と他の四字のくずし方を変えたのか、その区別はどういう理由か。小幡自身の書き方か? 板木作成者のデザインか? 洒落か? 疑問は解消されない。こうしたことを追究していくと、苦勞の多い解読作業ももっと楽しくなるに違いない。木版本、板木製作者のことについて研究されておられる方には、ぜひ情報の提供をお願いしたい。

とんだお些末な話ではあるが、翻刻の難しさの一端を知っていただければ幸いである。

[追記]『Media Net』(No.17, 2010、慶應義塾大学メディアセンター)に、都倉武之さんの「福沢諭吉著作等の版本について—その現状と来歴—」が掲載されている。ぜひ参照されたい。



『小幡篤次郎著作集』第1巻 かんせい ひろう
完成披露
できあがりおひろめ

西 沢 直 子

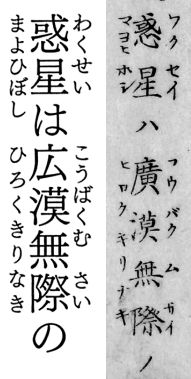
小幡篤次郎著作集の魅力

『小幡篤次郎著作集』の刊行がスタートした。早くも反省点にも気づいてはいるが、まずはこの著作集の魅力を述べておきたい。

第1に、これまで『天変地異』の序文や『生産道案内』など、いわゆるくずし字の多用により読者を選んできた彼の著作が、活字で読めることである。本号掲載の川崎勝氏の小論からおわかりになるように、解説に苦労した文字も多々あったが、平石直昭氏が触れられているように初期の慶應義塾の活動上も注目すべき著作を、研究に耐え得るテキストとして提供できたと思う。

第2に、多様なふりがなの再現である。幕末から明治初期に、西洋の書物から得られる智をより多くの人びとと共有しようと考えられた方法のひとつが、多様なふりがなであった。音を示すに止まらず、財本「もとで」のように意味が示されたり、秒「セコンド」のように原語の音がカタカナで示される。小幡は『博物新編補遺』の凡例で、これは識者に示す書ではないから、邦訳と漢音を字傍に施し、邦訳のないものは「児童英語を知るの梯階」となすため原語（のカタカナ表記）を施したと述べている。かなり繁雑であるため、『福澤論吉全集』（岩波書店）では版本のふりがなは削除され、難読語に改めて付されたが、本著作集では、当時の読者が新しい

知識とどのように向き合ったかを知るひとつの手がかりとして、慶應義塾大学出版会の前島康樹氏の尽力のもと、版本通りにふりがなを再現することにした。幽頭「ゆうけん」「みゑかくれ」、惑星「わくせい」「まよひぼし」、監督「かんとく」「みかじめ」、蛮野「ばんや」「ひらけぬこと」、貯財「ちょざい」「たくはへのかね」など著者の工夫をご堪能いただきたい。



編集におけるジレンマ

この本が小幡の知名度を上げ、彼の研究の進展を通じて、近代日本研究に多面的に貢献できるものになればうれしかったが、多くの方に読んでもらうための読みやすさと、良質なテキストに必要な底本に対する忠実さは、しばしば相容れなかった。編集は研究者が引用できる許容範囲を考えながら、バランスを衡る作業になった。

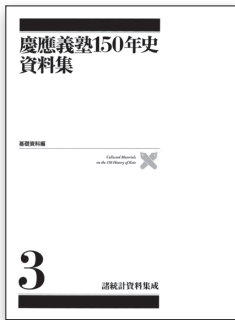
底本の選定も、悩みの種であった。初版と目されるものを採用するか、生前の最終版がよいのか。当初は1つの底本を定め、その通りに活字化すべきであると考えたが、実際には最良の1冊を見出すことは不可能であった。初版の誤りは再版以降で訂正されていることもあるが、同時に初版の方が正しい部分も多い。たとえば初版では正しい「ナ」「チ」が、再版では「ノ」「ナ」になって意味が通じないといった例で、おそらく元の板木からの刷紙を利用して、版画のように反転させて彫る被せ彫りが行われたため、墨が薄かった部分を彫師が誤った結果と思われる。福沢研究センターに保存されている板木は、同一部分が複数枚あり、また木片をはめ込んで一部訂正しているものも多く、細かな訂正や差し替えが何度行われたかを検証することは困難であった。その結果、基礎とする版に他の版も合わせて正誤訂正を行い、小幡の言葉がより正確に伝わるテキストの作成を目指した。

横たわる課題

それでも、誤字、欠字、衍字の多さ、それに用字の不統一は悩ましかった。ふりがなも望遠鏡「ぼうゑんきやう」「ぼをゑんきやう」「とほめがね」「とをめがね」のように表記は様々で、隣接していても異なることがある。不統一は濁点、半濁点も同様であった。多様ゆえに原則として統一はせず、前述のように各種版本を比較して、できる限り統一的な表記を採用した。また明らかに間違いと思われるものは訂正した。

この世に存在するのかわからないのか、わからない文字もよく登場した。諸橋轍次編大修館書店『大漢和辞典』にも、小学館『日本国語大辞典』にも掲載されていない漢字は彫師の誤りと考え、似た字形で意味上適切と思われるものに変えた。用字が現在と異なるものについては、「太陽」「思儀」のように著作を超えて共通で使用されているものについては、そのままとした。誤りは文字だけでなく、年号の対応関係や天体の距離など事実関係もいくつかあるが、いずれの版でも訂正がなされていないければ、そのままを記載している。

テキストは川崎・平石両刊行委員、沢株正始氏、山根秋乃氏のご意見を伺い、前島氏と作成した。次なる第2巻には、また別の課題が生じている。年末には無事第2巻が届けられるよう、努力したい。



『慶應義塾150年史資料集』 第3巻を刊行して

西 沢 直 子

統計表の“索引”作成

第2巻の刊行からすでに6年近くが過ぎ、ようやく本年3月に第3巻を刊行することができた。基礎資料編の3冊目で、諸統計資料集成である。2015年に編集をスタートさせ、まずは慶應義塾が塾の全体像を示すものとして、定期的に刊行してきた冊子類の概要とそこに掲載されている統計について、情報をまとめてみることにした。いわば諸統計の“索引”を作成したわけである。資料集では掲載できる表数にも限度があるため、“索引”を提供することは読者の便宜にもなると思われた。作成してみると、定期刊行物では網羅できない時期や、資料が少ない分野も明らかになり、本資料集は次に掲げる3部構成を採ることとした。

本資料集の構成

- 第Ⅰ部 慶應義塾の統計資料
- 第Ⅱ部 慶應義塾学事統計
- 第Ⅲ部 福沢研究センター所蔵統計資料

第Ⅰ部には、前述“索引”を掲げた。慶應義塾で統計を取り得るようなデータ収集が始まったのは、1863(文久3)年春の「性名録」(入門時の記録)からで、1891(明治24)年になると慶應義塾を支える「社中」の人びとへの報告を目的として『学事及会計報告』の刊行が開始され、その後1900～1942(昭和17)年度まで『慶應義塾学報』(1915年より『三田評論』に改題)に収録された。併行して1903年から『慶應義塾総覧』の刊行が始まり、また1924(大正13)年からは『三田評論』に「義塾の近状」「義塾現況に関する諸表」が掲載されるようになった。戦後は不定期に3冊の『慶應義塾総覧』が刊行されたが、1962年度より毎年『慶應義塾年鑑』が発刊されるようになり、多くの統計資料が掲載される。2004(平成16)年度には『慶應義塾の活動と財務状況』が創刊され、よりわかりやすく現状が数値で報告されるようになった。

第Ⅱ部では第Ⅰ部に掲げた諸誌から、明治・大正・昭和・平成の入学志願者、入学者、在学者、卒業者に関する数値をまとめた。またごく一部だが、学生のス

ポーツや愛読書の調査結果も転載した。

第Ⅲ部では、欠落した時期や分野の補填として、福沢研究センター所蔵資料の中から、留学生や学生生活に関するもの、学事統計等を収録した。

大きな課題

編集するにあたって直面した問題は、調査対象や時期等が明らかでない、あるいはすぐにはわからない統計が多かったことである。特に戦前期は誤植が多く、表題や項目名の変更が意図的か否かがわからず、表として統合が可能か否かの判断が困難であった。

さらに編集にはexcelを利用したため、合計値の不一致がすぐに明らかになった。実際に資料集をご覧いただくとお分かりになるが、その数はあまりにも多い。全てが合算のミスであるなら訂正は簡単であるが、合計に至るまでのいずれかの部分の誤りと思われるものも、しばしば見出された。

こうした誤りは近年になるまで存在し、調査の前提が明らかでないと、個別に検証しても正解が見いだされるとは限らなかった。そのため今回の資料集では、明確な誤りを除き、そのまま掲載する方法を取った。統計資料としては重大な欠陥ともいえるが、中途半端な検証によって数値が独り歩きするよりも、資料集の利用者に使用法を委ねる方が賢明であると判断した。

第Ⅲ部については、B5判縦型および紙幅の制約のなかで、主に戦前期の縦書きのため右から左へと展開する表のスタイルや、漢数字表記を維持することが難しく、原型を変え、横書き、算用数字に改めざるを得なかった。これも資料集としては不備であったかもしれない。また時に表に余白も多い。都道府県名など省略しても原型が分かるものについては表を縮約したが、たとえば退学理由のような場合、選択肢にどのような項目が存在したかも重要であると考え、あえて元のままを掲載した。

コロナ禍で

今回の編集では、在宅勤務において情報を共有することの難しさを痛切に感じた。机を並べて作業をすれば、他人の質問も自然と耳に入り、それに対する回答を各自が作業に反映する、あるいは関連した質問に発展させることも容易であるが、在宅作業では共有に時間がかかる。しかし反面、在宅の作業を余儀なくされたことで、センターのスタッフ、調査員、アルバイトの方々はこの資料集に多くの時間を費やしていただくことができた。みなさんの尽力によって、第3巻は刊行に至ったといえる。

	1905 (昭和10)		1907 (昭和12)		1908 (昭和13)	
	4年終了	卒業	4年終了	卒業	4年終了	卒業
昭和4(1929)年	4	2				
昭和5(1930)年	1	3				
昭和6(1931)年	3	5				
昭和7(1932)年	6	27				
昭和8(1933)年	13	119	0	4	1	0
昭和9(1934)年	18	351	4	34	2	3
昭和10(1935)年	272	456	2	127	2	19
昭和11(1936)年			10	419	6	156
昭和12(1937)年			285	534	6	521
昭和13(1938)年					275	513
計	313	963	301	1,118	295	682

種別	1907 (昭和12)		1908 (昭和13)	
	参加者	回数	参加者	回数
水泳	132	118		
野球	150	154		
蹴球	170	169		
柔道	95	114		
剣道	177	166		
弓道	38	28		
相撲	43	61		
陸上競技	65	57		
乗馬	30	30		
体操	23	33		
剣球	58	56		
スキー	49	42		
スキーボード	25	26		
自転車乗車	24	11		
卓球	26	25		
登山	36	23		
テニス(硬式)	13			
音楽(楽隊)	19	28		
空手	15	8		
種別	1907 (昭和12)		1908 (昭和13)	
	参加者	回数	参加者	回数
角力	4	5		
空手	6	3		
アイスホッケー	5	3		
ボート	2	2		
射撃	1	3		
ゴルフ	1	3		
体操	6			
ボート	12			
自動車	2			
乗馬	1			
サッカー	3			
剣道	1			
相撲	1			
球蹴	1			
フェンシング	1			
乗馬	1			
乗馬	14			
行はざる者	157	89		



野球小説家安倍季雄の発見

—慶應野球と近代日本展余滴—

福沢研究センター調査員 今井隆太

福沢諭吉記念慶應義塾史展示館は2022年度春季企画展として、6月6日(月)より8月13日(土)まで「慶應野球と近代日本 “ヘラクレス” から “Enjoy Baseball” へ」を開催する。筆者は近代日本の文芸において慶應野球がどのように表象されたかを調査した。調査結果は『図録』を参照していただきたい。福沢研究センターが兼ねてより注目していた雑誌『少年』を検討するなかで、安倍季雄の存在に気づくこととなった。

安倍季雄の生涯は、山形の地方新聞「荘内日報」に掲載された記事「郷土の先人・先覚118 童話作家 安倍季雄」(1989年2月掲載、秋保親英執筆)によって知ることができる。安倍季雄は明治13(1880)年9月7日、安倍親名の三男として鶴岡天神町に生まれた。祖父安倍親任は庄内藩の史家で、著書に「筆濃餘理」(ふでのあまり)がある。生育環境は厳しかった。幼少にして他家の養子となり苦学した。朝陽学校八坂町分校から高等科に進む。朝陽学校は明治9(1876)年に当時の県令三島通庸が建てた小学校。優秀だったが貧しかったため、卒業後は野沢活版所で文選工、東田川郡役所の給仕、押切小学校および渡前小学校の代用教員を勤めた。しかし向学の念やみ難く、函館中学校に入学し明治36(1903)年24歳で卒業した。

やがて同じ鶴岡出身の慶應義塾大学部教授田中一貞の知遇を得て上京する。田中もまた苦学したひとだった。初代社会学教授にして図書館長を兼ね、野球部長も兼任。塾史展示館のある旧図書館が建った頃、塾内には田中を通じて庄内人脈が息づいていた。ところで郡役所の給仕や代用教員の経験が編集者への階梯になり得たのだろうか。ここで連想されるのは石川啄木である。年齢は啄木が6歳下。最終学年で中学を退学したのち、代用教員などを経て小樽日報記者となる。作歌の傍ら度々上京を試みた。安倍もまた文芸に強い関心を有し、編集の傍ら創作に励む。当時中等教育を経て文芸に志す者が記者編集者の供給源だったものか。

安倍は現在の『三田評論』の前身、『慶應義塾学報』の編集者となる。つづけて明治41(1908)年時事新報社に入り、月刊誌『少年』および『少女』の編集主幹として活躍する。また同43(1910)年5月、永井荷風を編集主幹として創刊された『三田文学』にも関わった。時事新報社ではのちに雑誌部長となるが、昭和4(1929)年退社し東京中央放送局に入り『コドモ・テキスト』編集顧問となった。この頃までに久留島武彦とともに口演童話を開拓、大阪毎日新聞囀託講師として全国各地に講演旅行する。講演は1万回を数えたという。戦後は全国童話人協会の

設立に関わり、やがて代表を務めた。昭和37(1962)年没。

アメリカ合衆国から野球が伝来したのは明治5年という。13年生まれの安倍季雄の少年時代には、ようやく学生のあいだで野球熱が高まり始めていた。『学報』の編集に従事した明治30年代半ばは初期早慶戦の時代。応援合戦が加熱した結果、明治39年から大正14年までの長期中断期間が生じる。翌40年慶應義塾はハワイのセントルイス野球団を招聘、綱町グラウンドで試合が行われた。このときになって初めて安倍は、「最初の国際競技といふ特殊の興味に刺激せられて」見物した。ところが「好奇心が興味と変じ、驚異の念がやがて研究的に進む」事態となる。熱し易い性格というか、2ヶ月ほど「野球に関する読み物は片っ端から耽読した」あげく、「早くも自称野球通となった」。その勢いで『学報』に野球小説を載せてしまう。(「野球と僕」『光栄の勝利』所収)。つまり安倍は実際の早慶戦は観戦せず、最初に観たのが日米対抗戦だった。

最初の野球小説「小説 芙蓉野球団」(『慶應義塾学報』第156号より3回連載、明治43年7-9月、筆名・遜幼生)を見よう。作品の時代設定は早慶戦が中断して「十余年」。東京には10以上もの職業野球団が存在し、早慶戦復活は既に人々の眼中にないとされる。なかでも関東倶楽部は日米混合メンバーにしてアメリカの職業野球団と互角に戦う。日本にはもはや敵無しとまで豪語し、まして学生野球など相手にせずという勢い。そこに名乗りを上げて各学校の連合軍組織として芙蓉倶楽部が成立、早慶および一高、学習院のOBにより前年10月に結成された。ところが注目の関東対芙蓉戦は関東倶楽部の全勝に終わる。芙蓉はわずか1点を返したのみ。そこで翌年は雪辱戦が組まれたが、その直前、期待の投手が急性脳溢血で急死する。そこで補充されたのが早大の現役投手 近金吾(ちかし きんご)である。さて両軍が激突するのは池袋の新グラウンドで7万人を収容する大球場(ちなみに現在の東京ドームは野球の試合の場合4万6千人収容)。初戦は注目の近投手(途中から読みが「こん」に替わる)が負傷するものの辛勝。2戦3戦は連敗して4戦目で芙蓉倶楽部が復活勝利する。ところで関東倶楽部に対して、職業としての野球への違和感があるのも興味深い。職業野球が存在しなかった当時、野球はあくまで学生の余技たるべしとされ、合理的なアプローチをもって、商業主義に裏づけられた大人の駆け引きに対抗する。結びの言葉に、「野球の真髄は手腕と技倆ばかりぢやない、偉大なる人格と、不撓の意気精神は、また野球技の必須条件

なる事を記憶せよ」という。勝利至上主義にあらず、早慶両選手たちはチームメイトとして協力しあい、関東と芙蓉はいずれも2勝2敗で決着はつかない。作者安倍季雄は呑気というか釈迦力にはなれない性質で、それが作品に漂う「気品」に通じているのがおもしろい。

もう1作だけ紹介しよう。発表はずっと下って大正11年、『少年』第221号に掲載された「野球小説 日米親善の為に」(筆名・雲井龍之助)だ。のち「ママさん譲次」と改題され『野球ロマンスバットの響』(1923年、大阪屋号書店)に収録。登場する内藤譲次少年はかつて慶應でプレーしたことがある。その父は米国に移民して財を成したが、白人の排日熱のため全てを失って、目下譲次少年は「喫茶店の給仕に身を落として」いる。「ママさん譲次」というあだ名は父を喪い母を大切にす健気さを表している。

さてかれはアメリカ合衆国でプロの野球選手を志す。国民外交の担い手となるためである。「口ばかりの博愛主義や、お義理の日米親善論は、到底両国永遠の平和を保證する所以ではない。真の日米両国民の提携、親善は、国民外交の力にまつ外ないといふのが、少年譲次の信念であり、又意見でも」ある。少々立派すぎる嫌いはある。

かれはいう、「今日米国で駐米日本大使幣原氏の名を知らぬ人があっても、早川雪洲といふ一活動俳優の名を知らぬ者のない事実を知っている。近くは庭球界の名手として、熊谷一弥、清水善蔵(正しくは善造)両氏…(中略)…が、今年デヴキス カップの争覇戦に、世界選手権の把持者であるチルデン氏等と、最後の決勝を争った一事が、どれだけ米国人の脳裡に好印象をとどめたか知れなかった。そしてそれが、百の霞ヶ関外交官が口を酸くして宣伝しつつある日米親善論よりも、遥かに有力である事を見のがすわけにはゆかなかった」。熊谷一弥(1890-1968)は慶應義塾に学んだ。幣原喜重郎(1872-1951)は大正8-11(1919-21)年駐米大使、のちの総理。

物語ではやがて、譲次少年が黒熊軍(ブラックベヤース)の支配人コムスキイ氏の慧眼にかなってチームに迎えられ、白鷲軍(ホワイトイーグル)と対戦することになる。チーム名は白人対有色人種を象徴する。当時メジャーリーグは白人独占だった。試合は一進一退、人種

的偏見に晒されたり、そうかと思うとよき理解者に恵まれたりする。日本人というアドミラル・トーゴー(日本海海戦の東郷平八郎元帥)になぞらえられたり、また暴漢に襲われたりもしながら譲次は大活躍。当時アメリカ合衆国でニューヨーク・ヤンキーズを率いたジョン・マグロー(1873-1934)監督は有色人種混合チームの構想を練っていた。

発表の舞台となった『少年』の誌面造りは独特で、実在する学生野球の選手たち、度々来日したアメリカ合衆国の野球団との試合の写真があり、あたかもその試合の実況のように物語が展開する。空想実況中継という極めて特殊な誌面は早慶戦の中断期間、復活が待望される状況で花開いた形式だった。

三田の卒業生を対象とした『学報』よりも、『少年』の読者層はより若い。中学進学を切望する地方の子どもたち。『少年』は安倍を野球小説家に仕立てる磁場だった。『少年』は時事新報社が明治36(1903)年10月に創刊し昭和4(1929)年まで続いた。初期はお上品な誌面作りだったが、安倍が編集に従事した大正以降時代の趨勢を意識し、表紙の人物画も活き活きしてくる。面白いのは時代の流れに乗りながら、これに棹さす面も見られるようになってくる点だ。軍国主義、皇室崇拜は表層に見えるが、深層には日米交流それも民間主体の交流の意義、また人種的偏見の不当、暴力行為の卑劣が表象される。国粹保存、自尊を主張しながら国際平和協調を説く『少年』の論調は、当時の鎌田栄吉塾長(1857-1934、塾長在任は1898-1922)の意見を強く反映していた。表層は一等国の地位を得ながら領土拡張の意図を隠し持ち、欧米は軍縮時代でありながら軍備拡張を模索した当時の日本に対し、少年向け野球小説を通じて平和主義を説いた安倍季雄は、鎌田栄吉塾長時代の慶應義塾との連携の面から検討されるべきだ。安倍季雄には従来とは別の角度から光が当たることになり、鎌田塾長時代の慶應義塾は、その現代的意義が改めて見直される契機ともなるのではないか。



明治42年11月1日発行の『少年』表紙



大正10年1月8日発行の『少年』表紙

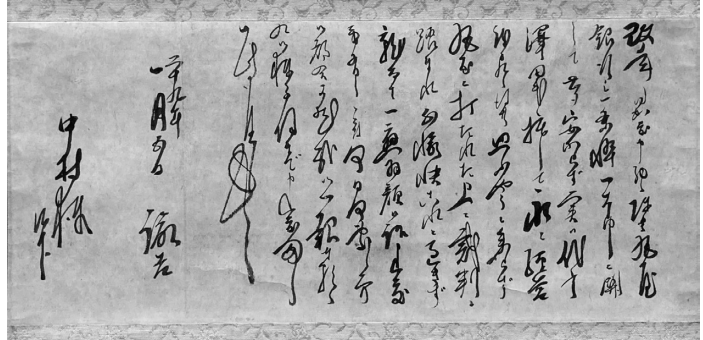
新収資料紹介

■ 中村道太宛福沢諭吉書簡 1幅

明治29年(1896)1月5日付

【購入】

中村道太は豊橋出身の実業家。福沢の紹介で知り合った早矢仕有と丸屋商社の共同経営者となり帳簿類を管理した。豊橋で第八国立銀行を創立、明治12年には横浜正金銀行の創立に参画して初代頭取となった。松方デフレの不況下で辞任後苦境に陥るものの、東北の銀山の再開発に成功する。その後、東京米商会所の頭取に就任するが、政争に巻き込まれて失脚した。本書簡は丸家銀行に関連する福沢一太郎の係争事件について相談するため面会を求めるもので、書幅に仕立てられている。『福沢諭吉書簡集』第9巻刊行時には校訂ができていなかった。

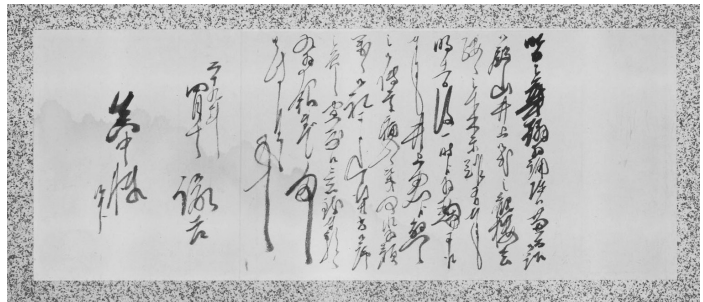


■ 真中直道宛福沢諭吉書簡 1面

明治29年4月10日付

【購入】

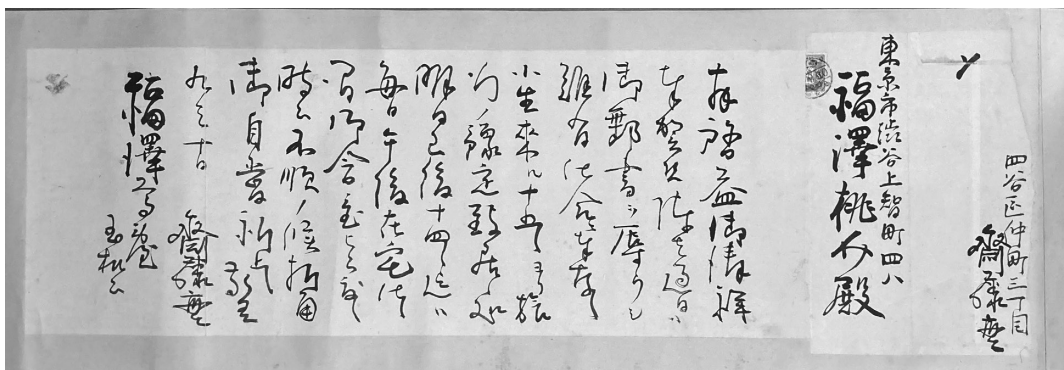
真中直道は埼玉出身。明治11年慶應義塾を卒業後、横浜・東京の駅通局属官、在英日本公使館勤務、法制局参事官、農商務省書記官、慶應義塾大学部教員などを務めた。大学部では経済学を担当している。本書簡は井上馨邸での観桜会に出席することを伝えるもので、額装されている。『福沢諭吉書簡集』第8巻刊行時には校訂ができていなかった。



■ 福沢桃介宛来簡集 7巻

【購入】

福沢桃介への来簡が貼り込まれた巻子をインターネットオークションや古書店より購入した。福沢桃介関係資料は10数年来市場に出回っており、以前にも同種の資料を購入している。今回購入した巻子はすべて同じ体裁で、番号が振られていることから、もとは同じところにあったものと考えられる。差出人は益田孝、山下亀三郎、団琢磨、岡崎邦輔、金子堅太郎、古島一雄、斎藤実、南次郎と実業家、政治家、軍人など様々で、武藤山治、高橋義雄など慶應義塾関係者も見られる。福沢研究センターには福沢桃介の生家である川越の岩崎家資料の寄託(本誌第27号参照)など関係資料が保管されており、積極的に収集している。



■ 永井荷風自画賛 1幅

【購入】

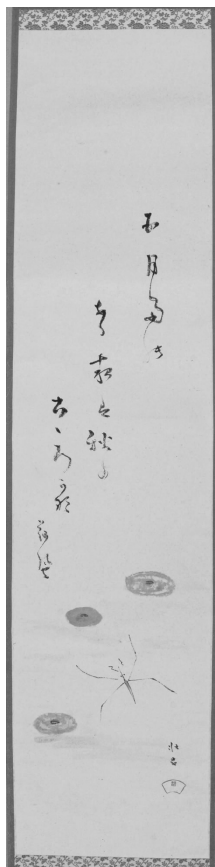
永井荷風は、明治43年(1910)、森鷗外・上田敏の推薦で慶應義塾大学部文学科に招聘され、『三田文学』の初代編集主任となり、荷風を慕う多くの若者が三田派を形成していくこととなったことは広く知られるところである。本資料は、古書店を通じて入手した自画賛で、「五月雨の ふる夜は秋の ころかな 荷風」という句とともにあめんぼうが描かれ、絵には「壮吉」と本名で署名がある。

昨年開館した慶應義塾史展示館においても文学における三田派の存在を紹介しているが、これまで当センターには文学者関係の資料が乏しかった。三田メディアセンターには「三田文学ライブラリー」が存在し、泉鏡花の自筆原稿を始め、多くの貴重な資料が集積されており、開館時にもそのコレクションから鏡花作品を借用した。ただしこのコレクションは新規収集の方針はないとのことなので、近年は福沢研究センターにおいて三田文学関連の資料収集を行っている。

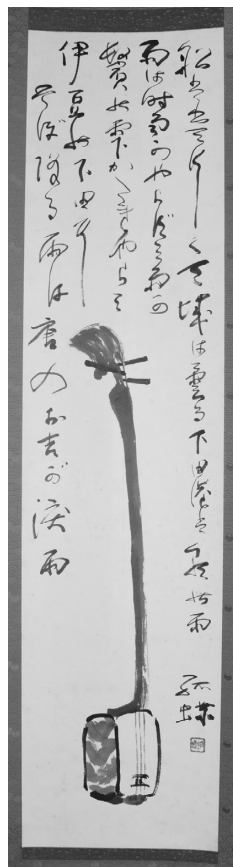
この10年あまりの間で、多少まとまりを持った資料としては「三田文学の精神的主幹」と言われた水上瀧太郎(阿部章蔵)関係資料(これは「三田文学ライブラリー」への瀧太郎資料提供時に遺族の元に残されたものや父阿部泰蔵、子息阿部優蔵関係資料、明治生命関係資料を含む)の寄贈、昭和3年(1928)～19年の三田文学編集長となった和木清三郎関係資料(来簡や写真)の購入などがあった。

それ以外は、古書店などに単発で出たものを収集したものが中心となるが、大正期に編集を担当したものの40代で早世した南部修太郎の原稿を5点収蔵したのをはじめ、戦後三田文学を再興し編集を務めた山川方夫の作品中でも評価の高い「煙突」(幼稚舎に同居中の普通部を舞台とした作品)の原稿(ただし冒頭部分を欠く)などが収蔵された。

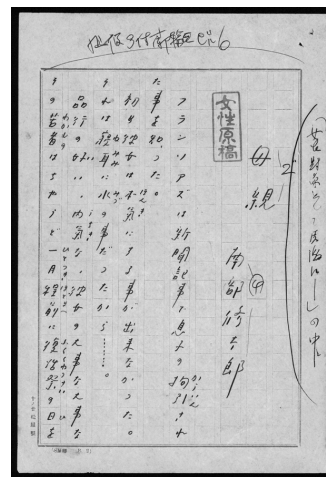
近年何らかの資料収蔵例がある作家には、下記のような顔ぶれがいる。馬場孤蝶、久保田万太郎、佐藤春夫、堀口大学、小島政二郎、茅野蕭々、村野四郎、安岡章太郎、堀田善衛、木々高太郎、柴田錬三郎。今後も文学関係の資料についても配慮し、折々に塾史展示館での公開など、展示の機会を設けたいと考えている。



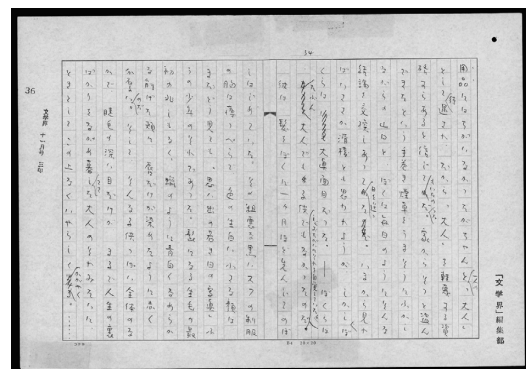
永井荷風自画賛



馬場孤蝶自画賛



南部修太郎
「母親」



山川方夫「煙突」

主な動き

■ 梨花女子大学との合同ワークショップ

11月5日(金)「韓日歴史をめぐるワークショップ Vol.5」がリモートで開催された。東館4階オープンラボからの配信となった。

参加者数は49名、韓国側は梨花女子大学の大学院生(博士課程)イ・ヒジェ氏が「普救女館名称の確立と命名の原理」、ソン・ハヨン氏が「朝鮮の舞踏家である裴龜子、裴龍子姉妹の生涯と活動」、日本側は福沢研究センター高野宏峰君が「明治中期苗場山麓地域の郵便ネットワーク」の題で研究発表を行い、その後積極的な討論が行われた。



■ 慶應大阪シティキャンパス (KOCC) 設置講座

2021年度は「福沢諭吉再考」と題して、11月27日(土)から毎月1回土曜日、全5回で開催した。

第1回は都倉武之君による「福沢諭吉の文章」、第2回(12月18日)は松岡李奈氏による「福沢諭吉と故郷・中津」、第3回(1月29日)は横山寛君による「福沢諭吉における運動と慶應義塾体育会」、第4回(2月26日)は米山光儀君による「近代日本教育史の中の福沢諭吉」、そして第5回(3月19日)平野隆君による「福沢諭吉門下の企業家たち：百貨店業界編」であった。多くは大阪での対面とリモートというハイブリッド形式で行なわれ、各回数名の対面での出席者を含み計50～61名の参加者があった。

■ 全国大学史資料協議会東日本部会研究会

12月16日(金)第124回東日本部会研究会が三田キャンパス東館ホールをメイン会場として、対面およびオンラインで行なわれた。出席者27名、リモートでの出席者34名。都倉武之君の基調講演の後、塾史展示館や構内の史跡巡りや質疑応答などが行われた。

■ 中津市との協力

新中津市学校市民講座は「中津と福沢諭吉」の題名で行われた。

11月20日(日)は翻訳者である西沢直子君とミヤン・マルティン、アルベルト君により、海外の翻訳者とインターネットをつないで、「中津留別之書」とは？ 概要や福沢思想を学ぶ」「中津留別之書」の各国翻訳について」のシンポジウムが行なわれた。



3月26日(土)には船木恵子氏による「小幡篤次郎と洋学」の講演が対面で行われた。

中津市アーカイブズ講座では、11月27日(日)に西沢君、上野大輔君によるリモートでの講義が行われた。講義内容は以下の通り。

西沢君「福沢諭吉と中津」

上野君「江戸時代における仏教教団の触頭制度とその地域的基盤」

また、1月15日～3月6日で開催された中津市歴史博物館・新中津市学校・福沢記念館の合同企画展「華麗なる福沢家の人々」に資料貸出など協力した。

■ 『近代日本研究』第38巻

2月28日付で『近代日本研究』第38巻が発行された。特集は「学校史の展示とその展開」、塾史展示館のほか、4大学から執筆いただいた。

■ “A Message of Farewell to Nakatsu” by Fukuzawa Yukichi Multilingual Edition with Commentaries in English and Japanese 出版のお知らせ

『福沢研究センター通信』35号でご紹介した『「中津留別之書」—多言語で読む福沢諭吉』が、一般書店でご購入いただけるようになりました。解説は改訂版が掲載されています。ISBNは978-4-7664-2799-8で、価格は本体2000円+税です。また今回は丸善 KnowledgeWorkerより、便利な電子化書籍も出版されました。詳しくは下記HPをご確認ください。

<https://kw.maruzen.co.jp/ims/itemDetail.html?itmCd=1034589154>

■ 諸会議

- *2021年度執行委員会(10月7日、11月4日、12月2日、1月6日、2月3日、3月8日)
- *2021年度小幡著作集編集委員会(10月18日、3月29日)
- *2021年度福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会(11月8日、3月7日)
- *2021年度小幡著作集刊行委員会(11月9日、3月25日(メール))
- *2021年度第2回福沢研究センター会議・塾史展示館所員会議(12月23日)
- *『近代日本研究』第39巻編集委員会(3月30日)

■ 人事

- <所員> 退任 太田昭子(法学部) ～3月31日
- <客員所員> 退任 西田毅 ～7月21日(逝去による)
- 退任 Craig, Albert ～12月1日(逝去による)

■ 主な来往

- *女子高生塾史展示館見学対応(10月5日)
- *図書館流通センター、港区史資料撮影のため日吉西別館来訪(10月29日)
- *普通部高橋君、清野君来訪(11月1日)
- *中津市教育長栗田英代氏来訪(11月8日)
- *中津市教育委員会松岡李奈氏、三谷紘平氏来訪(11月12日、12月7、8日、3月9、10日)
- *塾高生塾史展示館見学対応(11月24日)
- *白井堯子氏、塾史展示館見学対応(12月9日)
- *幼稚舎教員塾史展示館見学対応(12月14日)
- *国立歴史民俗博物館、資料返却のため来訪(12月22日)
- *応援指導部員、塾史展示館見学対応(1月6日)
- *幼稚舎生塾史展示館見学対応(2月22、24日)
- *横浜初等部6年生塾史展示館見学対応(2月25日)

■ 取材対応

- *読売新聞論点10月26日掲載(10月4、12日対応、皇室関係)
- *テレビ朝日「じゅん散歩」10月26日放送(10月5日対応、塾史展示館関係)
- *東京新聞10月19日掲載(10月12日対応、戦争関係)
- *塾生新聞(10月22日、11月17日対応)
- *NHKBSプレミアム「英雄たちの選択」1月19日放送(10月25日、11月29、30日、12月17日対応)
- *東京新聞12月9日掲載(11月10、16、22日、12月8日対応、真珠湾攻撃80年関係)
- *「週刊新潮」(12月6日対応)
- *日経新聞12月9日掲載(12月7日対応、真珠湾攻撃80年関係)
- *産経新聞3月1日掲載(1月27日対応、時事新報関係)
- *「マイ・ホスピタル Vol.92 2022年3-4月号」2月25日発行(2月2日対応)
- *TBS「報道特集」4月30日放送(2月14日対応、戦争関係)
- *共同通信(3月18日対応、特攻関係)
- *日経新聞3月29日掲載(3月23日対応、大阪慶應義塾関係)

■ 出張・見学

- *都倉、横山、資料返却のため羽二重団子訪問(10月13日)
- *西沢、中津出張(10月24～26日、11月19～22日)
- *都倉、横山、日吉オリパラ資料確認および野球部会宿所訪問(12月1日)
- *西沢、国立公文書館訪問(12月10日)
- *都倉、横山、野球資料閲覧のため船橋出張(12月15日)
- *都倉、横山、SFC山内研究室訪問(2月26日)
- *都倉、横山、野球関係資料調査のため島田家訪問(3月16日)
- *都倉、企画展関係資料調査のため山形出張(3月25～26日)

■ 講師派遣

- *都倉、慶應義塾全国議員連盟にて講演:「福沢諭吉における自治」(11月12日)
- *都倉、慶應倶楽部100周年記念式典シンポジウム(11月5日)

- *都倉、長野三田会にて講演:「北里柴三郎と福沢諭吉・慶應義塾」(11月19日)
- *西沢、ミヤン・マルティン、アルベルト所員、ヘレン・ポールハチェット客員所員、マリオン・ソシエ客員所員、ゲン・ティ・ハイン・トゥック客員所員、新中津市学校市民講座にて講演:『中津と福沢諭吉』『中津留別之書』の各国翻訳について(11月20日)
- *都倉、慶應大坂シティキャンパス(KOCC)福沢研究センター講座「福沢諭吉再考」にて講演(11月27日)
- *都倉、北里研究所にて塾員勉強会(12月6日)
- *都倉、SFC高等部5年生対象の学部説明会(12月7日)
- *都倉、横山、全国大学史資料協議会東日本部会で講演および塾史展示館見学対応(12月16日)
- *松岡李奈客員所員、KOCC福沢研究センター講座「福沢諭吉再考」にて講演(12月18日)
- *小室正紀顧問、早稲田大学大隈記念講堂での大隈重信没後100年講演:「大隈と福沢の交流を読み解くー近代日本の政治と経済ー」(1月10日)
- *都倉、中津市歴史博物館企画、塾史展示館でギャラリートーク(1月23日)
- *都倉、アートセンター地域の文化を読み解くラーニング・ワークショップ「コレクティブ・メモリー」講演:「大学と街の関わりー大学のある風景ー」(1月28日)
- *横山、KOCC福沢研究センター講座「福沢諭吉再考」にて講演(1月29日)
- *都倉、交詢社午餐会にて講演:「福沢諭吉を、魅せるー福沢諭吉記念慶應義塾史展示館の開館を担当してー」(2月4日)
- *都倉、港北地域学講演会にて講演:「慶應義塾と日吉」(2月5日)
- *米山光儀顧問、KOCC福沢研究センター講座「福沢諭吉再考」にて講演(2月26日)
- *都倉、学生部企画「福沢諭吉先生ゆかりの地を旅するー三田キャンパスツアーー」で塾史展示館案内(3月14、17日)
- *平野所長、KOCC福沢研究センター講座「福沢諭吉再考」にて講演(3月19日)
- *西沢、福沢諭吉協会土曜セミナー:「小幡篤次郎を語る」(3月26日)

■ その他

- *都倉、横山、塾史展示館業者との打合せ(10月4日、3月24日)
- *西沢、国分寺三田会面会(10月7日)
- *都倉、横山、大学史資料協議会全国大会(Zoom)(10月7日)
- *都倉、港区史会議(10月15日、11月15日、12月27日)
- *西沢、国際センター会議(10月28日、3月10日)
- *梨花女子大学史学科4段階BK21地域史世界史教育研究チーム・梨花史学研究所との「韓日歴史をめぐるワークショップ Vol.5」(11月5日)
- *都倉、三田メディア協議会(11月24日)
- *都倉、中津Zoom会議(12月3日)
- *西沢、新中津市学校打合せ(12月9日)
- *西沢、国際センター運営委員会(12月16日)
- *都倉、美術品管理運用委員会(12月22日)
- *都倉、KeMCo紀要委員会(1月17日)
- *西沢、福沢諭吉協会理事会(1月28日)
- *西沢、新中津市学校ワーキンググループミーティング(3月11日)
- *西沢、新中津市学校運営委員会(3月14日)
- *西沢、地域連携運営委員会(3月22日)
- *都倉、港区文化財保護審議会(3月22日)
- *西沢、福沢記念館評議員会(3月25日)
- *都倉、高橋由伸氏インタビュー(3月29日)

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長 平野 隆 商学部教授
 専任所員 西沢 直子 副所長、福沢研究センター教授
 都倉 武之 福沢研究センター准教授
 住田孝太郎 福沢研究センター特任助教(有期)
 所 員 朝倉 浩一 理工学部教授
 (兼運営委員) 井奥 成彦 文学部教授
 池田 幸弘 常任理事、経済学部教授
 武林 亨 医学部教授
 山内 慶太 常任理事、看護医療学部教授
 所 員 上野 大輔 文学部准教授
 梅津 光弘 商学部教授
 大久保健晴 法学部教授
 大久保忠宗 普通部教諭
 大塚 彰 志木高等学校教諭
 小川原正道 法学部教授
 小山 太輝 幼稚舎教諭
 齋藤 秀彦 横浜初等部教諭
 末木 孝典 高等学校教諭
 中西 聡 経済学部教授
 馬場 国博 湘南藤沢中・高教諭
 Millán Martín, Alberto 経済学部准教授
 藪本 将典 法学部准教授
 結城 大佑 女子高等学校教諭
 顧 問 岩崎 弘 元幼稚舎教諭
 小室 正紀 名誉教授
 坂井 達朗 名誉教授
 寺崎 修 名誉教授
 松崎 欣一 名誉教諭
 米山 光儀 名誉教授
 客員所員 安西 敏三 甲南大学名誉教授
 飯田 泰三 法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授
 區 建英 新潟国際情報大学教授
 太田 昭子 慶應義塾大学名誉教授
 加藤 三明 慶應義塾名誉教諭
 我部 政男 山梨学院大学名誉教授
 川崎 勝 山梨大学名誉教授
 佐藤 正幸 千葉県立衛生短期大学名誉教授
 白井 堯子 四天王寺大学教授
 曾野 洋 大妻女子大学短期大学部名誉教授
 高木 不二 東北大学高度教養教育・学生支援機構
 戸村 理 高度教育開発室准教授
 平石 直昭 東京大学名誉教授

平山 洋 静岡県立大学助教
 藤原 亮一 田園調布学園大学教授
 前坊 洋 中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
 松岡 李奈 中津市社会教育課中津市歴史博物館学芸員
 松沢 弘陽 立教大学教授
 松田宏一郎 慶應義塾大学産業研究所兼任所員
 宮内 環 慶應義塾大学産業研究所兼任所員
 宮村 治雄 青山学院大学教授
 山田 央子 韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
 林 宗元 韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
 Saucier, Marion Ho Chi Minh City University of
 Nguyễn thị Hạnh Thực Technology Lecturer
 Ballhatchet, Helen 慶應義塾大学名誉教授
 Knaup, Hans-Joachim 慶應義塾大学名誉教授

研究嘱託 石井寿美世
 石田 幸生
 大庭 裕介
 加藤 学陽
 金沢 裕之
 具 知會
 小林 伸成
 重田 麻紀
 柄越 祥子
 巫 碧秀
 堀 和孝
 三科 仁伸
 山根 秋乃
 横山 寛
 吉岡 拓

事務局 久我 竜二 事務長
 竹屋 早月 主 務
 内田 金蔵 同
 飯島 典子 事務員
 渋沢 彩佳 事務嘱託
 西村 真由 事務嘱託
 奥山 美樹 派遣職員
 岡部 敏和 非常勤嘱託
 柄越 祥子 非常勤嘱託

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、10名
 (4月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第36号

Newsletter of
 Fukuzawa Memorial Center for
 Modern Japanese Studies,
 Keio University

発行日 2022年4月30日 (年2回刊)
 編 集 慶應義塾福沢研究センター
 発 行 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
 電 話 03-5427-1604
 http://www.fmc.keio.ac.jp/
 印 刷 (有)梅沢印刷所